

# 歌語「みるめ」表現考

大竹明香

はじめに

海辺に関連して和歌に詠まれる歌語に「海松布」がある。本稿では、『古今和歌六帖』や三代集に採られた「みるめ」が詠み込まれている和歌の用例を精査し、それらの特徴について考察する。さらには歌語「みるめ」が歌物語や『源氏物語』などの物語において用いられる際の、表現世界の拡がりについても詳しくみていきたい。

## 一 『古今和歌六帖』

はじめに『古今和歌六帖』に採られた和歌における歌語「みるめ」の用例を見てみたい。<sup>①</sup>以下にその用例をあげる。

①君こふるなみだのそこにうみはあれどひとをみるめはおひず

ぞ有りける

(古今和歌六帖・第三・一七五三・うみ)

②しらなみををりかけあまのこぐ舟はいのちにかふるみるめか  
るにか

(古今和歌六帖・第三・一八六三・みるめ)

③おほかたはわがなぞみなどこぎいでなん人をみるめもおきに  
こそかれ

(古今和歌六帖・第三・一八六四・みるめ)

④みつしほのながれひるまもあひがたみるめのうらによるを  
こそまで

(古今和歌六帖・第三・一八六六・みるめ)

⑤わたつうみのそこにあれたるみるめをばみ舟こぎてぞあまは  
かるてふ

(古今和歌六帖・第三・一八六七・みるめ)

⑥おほろげのあまやはかづくいせのうみのなみたかきうらに生

ふるみるめは (古今和歌六帖・第三・一八六八・みるめ)

⑦いせのうみのあさな夕なにかづくてふみるめに人をあくよし  
もがな (古今和歌六帖・第三・一八六九・みるめ)

⑧しらなみのたちさわぐともこりずまのうらのみるめはからん  
とぞ思ふ (古今和歌六帖・第三・一八七〇・みるめ)

⑨おもひくれなげきあかしのはまによるみるめすくなくなりぬ  
べらなり (古今和歌六帖・第三・一九一八・はま)

⑩よそなりし思ひ吹上のはまにほすみるめはかたき物にざりけ  
る (古今和歌六帖・第三・一九一九・はま)

⑪はやきせにみるめおひせばわが袖のなみだの川にうゑてみま  
しを (古今和歌六帖・第四・二〇八四・なみだがは・つらゆきある本)

⑫見るもなくめもなきうらのほまにいでてかへすがへすもうら  
みつるかな (古今和歌六帖・第四・二一一二・うらみ・ともりのりある本)

⑬なにはがたしほひのなごりあくまでに人のみるめをわれはと  
もしき (古今和歌六帖・第五・二六三六・ことひとを思ふ)

⑭ちかけれどあふみのうみぞかかりてふみるめもおひぬ中やな  
になる (古今和歌六帖・第五・二七六一・ものへだてたる・つらゆき)

⑮みるめなきわが身をうらとしらねばやかれなであまのあした  
ゆくくる (古今和歌六帖・第五・三〇三三・くれどあはず・こまち)

⑯このよにて君をみるめのかたからばこんよのあまとなりてか  
づかん (古今和歌六帖・第五・三三三〇・こむよ)

⑰なにせんにへたのみるめをおもひけむおきつたまもをかつく  
身にして (古今和歌六帖・第五・三三三八・裳)

『古今和歌六帖』において、歌語「みるめ」が詠み込まれた和歌  
が最も多く見受けられるのは、第三の部である。この『古今和歌六  
帖』第三の部立てには、「…せ・うみ・あま・たくなは・しほ・し  
ほがま・ふね・つり・いかり・あみ・なのりそ・も・みるめ・われ  
から・うら・かひ・なきさ・しま・はま・ちどり…」とあり、海辺

に関する歌語が並んでいる。これは、「みるめ」が海に生える海藻であることに関係するからであろう。

次に「みるめ」と共に多く詠み込まれている語に「海人」があげられる。②⑤⑥⑬⑭にあげた歌に詠み込まれており、「海人」は「みるめ」を採る者として詠まれている。この「みるめ」を採る意は、和歌においては「かる」や「かづく」の語が相当し、②③⑤⑥⑦⑧⑬⑭⑯の和歌に見られる。(ただし⑬は「離れなで」が「刈れなで」との掛詞となっている。)そしてこの「みるめ」を「かる」や「かづく」は、歌語「みるめ」の修辭法の特徴である人を「見る目」、すなわち、想っている相手に「逢う機会」を得るとの意として用いられていることがわかる。たとえば⑯では、実際には逢いがたい相手ではあるが、自分が「みるめ」を刈る「海人」となったら逢えるだろうか、と詠んでいる。また⑪のように、相手に逢う意となる表現に「みるめおふ」というものもある。これが「逢い難い」の意となる場合は、①⑭のように「おひず」や「おひぬ」となる。同様の意としては⑫や⑮のように「みるめなき」と詠まれている歌もある。

## 二 三代集

次に、三代集に採られた「みるめ」が詠み込まれている和歌を以下にあげる。<sup>(2)</sup>なお、先に『古今和歌六帖』の用例としてあげた歌を含む。

⑮はやき瀬に見るめおひせばわが袖の涙の河に植へましものを  
(古今和歌集・五三一・恋歌一)

⑲しきたへの枕の下に海はあれど人をみるめは生ひずぞありける  
(古今和歌集・五九五・恋歌二)

⑳みるめなきわが身をうらと知らねばや離れなで海人の足たゆく  
くる  
(古今和歌集・六二三・恋歌三・小野小町)

㉑満つ潮の流れひるまを逢ひがたみ見るめの浦によるをこそ待て  
(古今和歌集・六六五・恋歌三・清原深養父)

㉒大方はわが名も水門こぎいでなむ世をうみべたに見るめ少なし  
(古今和歌集・六六九・恋歌三・よみ人しらず)

㉓伊勢のあまの朝な夕なに潜くてふ見るめに人を飽くよしも哉  
(古今和歌集・六八三・恋歌四)

㉔浪分けて見るよしも哉わたつみのその見るめも紅葉散るやと  
(後撰和歌集・四一七・秋下・文室朝康)

ある所に近江といひける人のもとにつかはし

ける

②5 潮満たぬ海と聞けばや世とともにみるめなくして年のへぬらん

(後撰和歌集・五二八・恋一)

平正文がもとより、「難波の方へなむまかる」

と言ひ送りにて侍ければ

②6 浦わかずみるめ刈るてふ海人の身は何か難波の方へしも行く

(後撰和歌集・五五三・恋一・土佐)

題しらず

②7 見るめ刈る渚やいづこあふごなみ立寄る方も知らぬ我が身は

(後撰和歌集・六五〇・恋二・在原元方)

心ざしはありながら、え逢はざりける人につ

かはしける

②8 見るめ刈る方ぞあふみになしと聞く玉藻をさへや海人は潜かぬ

(後撰和歌集・七七二・恋三)

返事も侍らざりければ、又かさねてつかは

しける

②9 みるもなくめもなき海の磯に出でてかへるくも怨つる哉

(後撰和歌集・七九九・恋四)

消息しばくつかはしけるを、父母侍て、制

し侍ければ、え逢ひ侍らで

③0 あふみてふ方のしるべも得てし哉見るめなきこと行きてうらみ

ん (後撰和歌集・八五八・恋四・源善の朝臣)

題しらず

③1 伊勢の海に遊海人ともなりにしか浪かきわけて見るめかづかむ

(後撰和歌集・八九一・恋五・在原業平朝臣)

返し

③2 おぼろげの海人やはずく伊勢の海の浪高き浦に生ふる見るめ

は (後撰和歌集・八九二・恋五・伊勢)

文つかはしける女の、親の伊勢へまかりけれ

ば、共にまかりけるに、つかはしける

③3 伊勢の海人と君しなりなば同じくは恋しき程に見るめ刈らせよ

(後撰和歌集・九〇八・恋五)

滋賀の辛崎にて、祓しける人の下仕へに、み

るといふ侍けり。大伴黒主そこまで来て、

かのみるに心をつけて言ひたはぶれけり。祓

果てて、車より黒主に物かづけける。その裳

の腰に書きつけて、みるに贈り侍ける。

③4 何にせんへたのみるめを思けん沖つ玉藻をかづく身にして

(後撰和歌集・一〇九九・雑一・くろぬし)

返し

③5 かづき出し沖の藻屑も忘れずはそのみるめを我に刈らせよ

(後撰和歌集・一一四九・雑二・輔臣朝臣)

亭子院にさぶらひけるに、御齋の下したまは  
せたりければ

③6 伊勢の海に年へて住みしあまなれどかゝるみるめはかづかざり

しを  
(後撰和歌集・一二七九・雑四)

③7 みるめかる海人とはなしに君恋ふる我が衣手のかはく時なき

(拾遺和歌集・六六七・恋一)

歌語「海松布」は、そのほとんどが「見る目」との掛詞として用いられ、和歌においては「相手に会う機会」すなわち「逢瀬」の意を暗喩する表現として詠まれていることがわかる。これは、『古今和歌六帖』と同様である。またこのことは、先にあげた三代集の②4、③4、③5、③6、が雑の部であることを除くと、他はすべて「恋の部」であることからわかる。この部立ての特徴は三代集になって新た

に指摘しうる特徴である。くわえて『古今和歌六帖』においても確認したとおり、「海松布」が詠み込まれた和歌を見ると、歌語「海松布」は海人や浦、波などの語が縁語として用いられており、なかでも、海人が「みるめ」を刈ることから、「みるめ」から「刈る」の語が導かれ、「みるめ刈る」と詠まれている歌も散見する。「みるめ刈る」とは、「見る機会を得る」、多くは男性が女性に「逢う機会を得る」の意を表している。

そして、「みるめ」が詠み込まれた和歌には、伊勢や近江の地名が共に詠み込まれているものがある。しかし、②3、③1、③2、③3、③6の和歌において「伊勢」が「みるめかづく」など、「みるめ」を採る、すなわち「見る目を得る」ことができるとの意を含ませて詠まれているのに対し、②7、②8、③0の和歌において「近江」は「みるめ」に「なし」の語が付与され、「見る目を得られない」の意として詠まれていることも、特徴の一つとしてあげられるだろう。

「近江」に「みるめ」がないと詠まれていることについて、たとえば『歌ことば歌枕大辞典』の「近江の海」の項では、<sup>(3)</sup>

「あふみのみ」「淡海の海」とも。近江国の歌枕。滋賀県の琵琶湖。(中略)「逢ふ身」を掛けたり淡水ゆえ生えない海松布(見る目)を詠み込むのが主流となる。

との説明がなされている。これにあたる例としては、『平中物語』

二十四段「近江の守の女」の用例をあげることができる。<sup>(4)</sup>

また、この男、親近江なる人に、いとしのびてすみけり。さ  
るあひだに、この女の親、気色をや見けむ、くぜち、まもり、  
いさかひて、日もすこし暮るれば、門鎖して、うかがひければ、  
女は思ひさはり、男あふよしもなく、からうして、築地を越  
えて、この男入りけり。(中略)親、気色見て、いみじくの  
しりければ、「さらに対面すべくもあらず。はや、帰りね」と  
ぞ、いひだしたりければ、「ゆく先はともかくもあれ、つゆ  
にてもあはれと思はるるものならば、今宵帰りね」と、せちに  
いひだしたりける、帰るとて、男、

みるめなみたちやかへらむ近江路は名のみ海なる浦とら  
みて

男の詠んだ歌には、「近江(逢ふ身)の海とは名ばかりで、みる  
めも生えない」とある。この『平中物語』の用例は、「みるめ」の  
語が「近江」の語と共に詠み込まれる際に「あふみの海」「みるめ  
おひぬ」などの修辭法が確認できる格好の例であろう。

なお、『平中物語』における歌語「みるめ」の用例は、四段「断  
念」においても確認できる。

また、このおなじ男、この二年ばかり、ものいひすさぶる人

ぞありける。いかで、なほ対面せむといふ心ぞ、せちにありけ  
る。返りに、女、かくなむ。

わたつうみの底に生れたるみるめをば三年漕ぎてぞ海人は  
刈りける

男、返し、

うらみつつ春三返りを漕がむ間に命絶えずはさてややみな  
む

かかるほどに、この男、「死ぬべく病みてなむ」と告げれば、  
問はでやみにければ、さてやみにけり。

「逢いたい」と言う男に対する女の返歌は、海の底に生えている  
「みるめ」を、海人は三年かけて刈り取るのだ、との意であり、「見  
る目」、逢うことを拒んでいる。ここでも「みるめ」の縁語として  
「海人」、「刈る」の語が用いられており、この歌は先に確認してき  
た歌語「みるめ」の修辭法によつて詠まれていることがわかる。ま  
たここでは「底」の語も用いられているが、この「底」の語につい  
ては後述する。

### 三 歌物語における「みるめ」

ここからは、『源氏物語』に先行する歌物語の用例について詳し  
くみていきたい。はじめに、『源氏物語』絵合巻において「伊勢を

の海人の名をや沈めむ」(絵合②三八二)<sup>(5)</sup>と藤壺の言う『伊勢物語』の「みるめ」の用例を見てみよう。『伊勢物語』において「みるめ」の用例が確認できるのは、第二十五段、第七十段、第七十五段である。<sup>(6)</sup>

むかし、男ありけり。あはじともいはざりける女の、さすがな  
りけるがもとに、いひやりける。

秋の野にささわけし朝の袖よりもあはで寝る夜ぞひちまさ  
りける

色好みなる女、返し、

みるめなきわが身をうらとしらねばや離れなで海人の足た  
ゆく来る  
(二十五段 逢はで寝る夜)

二十五段の女の返歌は、『古今和歌集』に採られた小野小町の歌である。この歌は『古今和歌六帖』をはじめ、このように『伊勢物語』にも見受けられる歌である。二十五段は、昔男と「色好みなる女」との贈答歌として構成されている。『古今和歌集』においては、恋歌三、六二二番歌、在原業平の詠歌として前者の「秋の野に―」歌は入集しており、続く六二三番歌に小野小町詠「みるめなき―」歌が並列している。片桐洋一氏は六二二番歌と六二三番歌の関係及び『伊勢物語』第二十五段について、<sup>(7)</sup>

「秋の野に―」という贈歌と「みるめなき―」という返歌の間には、内容的な対応もなければ、用語上の共通性もない。「まだ見ぬ恋」を詠んだ歌という点が共通しているゆえに並んで採られているのであって、贈歌としてはなり立たない。『伊勢物語』が、『古今集』において業平の歌と偶然並べられていた小町の歌を増補して物語の成長をはかったと見るべきであろう。

と指摘する。この解釈は、現代の注釈書において通底しているもの<sup>(8)</sup>である。また片桐氏は、小町の「みるめなき―」歌の解釈史が、多岐にわたることを述べている。ひとつには歌意の解釈について、もうひとつは、『伊勢物語』において、業平の歌との贈答歌として物語が構成されていることによる、「色好みなる女」が小野小町かどうかについての議論である。なお、このような「みるめなき―」歌についての注釈史については、高野奈未氏に詳細な論考がある。<sup>(9)</sup>

「みるめなき―」歌の多岐にわたる注釈史の様相は、歌意の解釈の難しさにくわえて、説話化してゆく小野小町像とも関わりながら展開されており、歌語「みるめ」の用例のなかで、この歌が後代に最も影響を与え、享受されてきたことを表していると考えられる。さて、『伊勢物語』には、他にも「みるめ」の用例が散見する。以下に見てみよう。



むかし、男、狩の使よりかへり来けるに、大淀のわたりに宿りて、斎の宮のわらはべにいひかける。

みるめ刈るかたやいづこそ棹さしてわれに教へよあまのつり船  
(七十段 あまの釣船)

むかし、男、「伊勢の国に率ていきてあらむ」といひければ、女、大淀の浜に生ふてふみるからに心はなぎぬかたはらねどもといひて、ましてつれなかりければ、男、

袖ぬれてあまの刈りほすわたつうみのみるをあふにてやまむとやする

女、

岩間より生ふるみるめしつれなくはしほ干しほ満ちかひも  
ありなむ

また、男、  
なみだにぞぬれつつしほる世の人のつらき心は袖のしづく  
か

世にあふことのかたき女になむ。(七十五段 海松)

『伊勢物語』における「みるめ」の用例のうち、第七十段と第七十五段が「伊勢」の地に関わるものである。

『源氏物語』総合巻における藤壺の言葉には、「見るめこそうらふりぬらめ年へにし伊勢をの海人の名をや沈めむ」(総合②三八二)

とあり、かつて須磨、明石の地に流離の日々を過ごした光源氏の不遇を思う意が込められている。歌語「みるめ」が「不遇」の意に關わって用いられているものとして、『大和物語』三十段「ふけるの浦」に、以下のような用例が見出せる。<sup>(10)</sup>

故右京の大夫宗于の君、なりいづべきほどに、わが身のえなりいでぬことと、思ひたまひけるころほひ、亭子の帝に、紀伊国より石つきたる海松をなむ奉りけるを題にて、人々歌よみけるに、右京の大夫、

沖つ風ふけるの浦の立つ浪のなごりにさへやわれはしづまむ

これは、伊勢より献上された「石につきたる海松」を題として歌が詠まれたもので、「われはしづまむ」とは自身の不遇を嘆く表現である。ここでの「海松」は歌の詠題であった。「海松」が「不遇」の意を表す語を導く用例として「海松」に「うき」の語が付与されたものがあげられる。『大和物語』七十九段「須磨の浦」には、

また、おなじ親王に、おなじ女、  
こりずまの浦にかづかむうきみるは浪さわがしくありこそ  
はせめ



と「うきみる」の語が見受けられる。「うきみる」とは「浮き海松」である。

なお、『伊勢物語』八十七段「布引の滝」には、「つとめて、その家の女の子もいでて、浮き海松の浪に寄せられたるひろひて、家の内にもて来ぬ」とあり、「浮き海松」の語が確認できるが、ここでは海面に浮いている海松の意である。しかし、先にあげた『大和物語』七十五段の和歌においては「うき」には「浮き」と「憂き」の意が掛けられているのであるから、これまで見てきた、歌語「みるめ」の修辭法である「恋」に関わって用いられている用例とは異なった「不遇」や「つらさ」の意に関連して用いられているものと指摘することができる。

これまで見てきた『古今和歌六帖』や『古今和歌集』の用例では、その多くが「みるめ」は「逢う機会」の意として、「ある」、「なし」の意を表す語を伴って詠み込まれていた。歌物語においては、歌の詠まれた背景が詳しく語られはじめることにより、「みるめ」の語は、「逢う機会」の意にくわえて、新たな意味を表出する語を伴って用いられるようになる。これについて、『うつほ物語』における「みるめ」の用例から詳しい検討を加えてみたい。

#### 四 『うつほ物語』

『うつほ物語』においても「みるめ」の用例を見出すことができ

る。以下に用例をあげる。<sup>(1)</sup>

A 兵部卿の宮より、夕立のいたうする折に、

年経れどいとどつれなくなる神の響きにさへや驚かぬ君

あて宮、

響けどもつれなき人は驚かて天雲のみも騒ぐべきかな

左の大将殿より、海に臨きたる海人立てる州浜に、かく書きつく。

わたつ海の底にみるめの生ふればぞ我さへ頼む深き心を

あて宮、漁りしたる州浜に、かく書きつく。

漁りする海人は何ぞもうみといへどいかなる底に生ふるみるめぞ

平中納言殿より、

見る人は牡鹿の角にあらねども慰むほどのなきぞわびしき

あて宮、

思ふらむことは知られて夏の野に角落ち変はるしかとこそ

聞け

(祭の使二二一)

これは、いわゆる「あて宮求婚譚」の一部である。室城秀之氏は『うつほ物語』のあて宮求婚譚は、さまざまな求婚者があて宮に歌を贈ることによって展開される」と述べ<sup>(12)</sup>、あて宮求婚譚における求婚歌群を求婚譚そのものの表現として理解すべきであるとする。

なかでも興味深いのは、そもそも男君たちからあて宮へ贈られたそれぞれの和歌が求婚歌群として作中に存在すること、また求婚歌群の和歌に用いられた語が、「微妙に響き合いながら、これらの歌がどうやら一つの歌群を作っているらしいのである」との指摘である。つまり、求婚歌群の和歌は求婚者たちがあて宮へ各々に贈ったものであるはずだけでも、そのことは別として、作中においては「歌群として構成されている」ということである。氏は、このような求婚歌群の存在する意味を、

あて宮求婚譚は、正頼家の家としての現実的・政治的な選択によつて、あて宮の春宮人内を選び取つてゆく。それを支えるものとして、これまで見てきた求婚歌群がある。

と、あて宮求婚譚と求婚歌群との関係を指摘している。<sup>(13)</sup>

Aにあげた歌群も、求婚者たちとあて宮との贈答歌が並べられているものである。室城氏は、求婚歌群の和歌の特徴として、あて宮へ贈られた男君たちの和歌の語が響き合っていると指摘する。ここでは氏の指摘を踏まえ、Aにあげた歌群についての検討を加えてみたい。

傍線部に示したのは、歌語「みるめ」が用いられている箇所である。兼雅からあて宮に贈られた歌にある「底にみるめの生ふればぞ」との表現を受け、あて宮よりの返歌には「いかなる底に生ふるみる

めぞ」とある。前者はあて宮に逢う機会があるならば、との意であり、それに対して後者は、どこの海の底に生えるみるめでしょうか、つまり逢う機会はないとの意を含んでいる。ここでも男君から逢瀬を期待する「みるめ」との掛詞と、それを否定する女君からの「みるめ」表現が確認できる。

くわえて、「みるめ」の語が詠み込まれている和歌の前後にも視野を拡げてみると、点線部に示した語には「天雲」の「天」、続く「わたつ海の―」の歌の詞書には「海人」の語がある。この「海人」の語に導かれて、「わたつ海」や「みるめ」が歌に詠み込まれていることがわかる。またあて宮の返歌にも「海人」や「みるめ」の語が確認でき、これらは多少ではあるが、響き合っていると見える。

さらに次の「見る人は―」の歌は正明からあて宮への贈答歌であり、この歌は海辺とは何ら関わりのない歌である。しかし「見る」は前の「みるめ」と言葉の上では関わっていないといえる。このように、Aであげた求婚歌群においても、言葉の繋がりが確認できるのである。

あて宮へ贈られる和歌に「みるめ」や「見る」の語が用いられるのは、あて宮が男君から「見る目」つまり逢瀬を期待させる人として造型されているからであろう。このことは、次にあげる長歌においても確認できるものである。

B あて宮、見給ひて、「あはれ」と思せど、物ものたまはず。源

宰相、悲しくおぼゆれば、三月つごもり方に、かう聞こゆ。

かけて言へば 塵と砕くる 魂に 深き思ひの つきしよ  
り 入江の床に 年を経て 列を並べて 住む鳥の 行方  
も知らず 鴛鴦の子の 立ちけむ方も 思ほえて 黄なる  
泉に 消えかへり 涙の川に 浮き寝して 今や今やと  
頼み来し 君が心を 限りとぞ 思ひし日より 山里に  
一人眺めて もえわたる 深き山辺と みつ潮は 袖の濡  
るまで 堪へども みるめ求めむ かたもなし 今ほかひ  
なき 心地して 名残りぞものは 悲しかりける  
など聞こえけれど、御返りなし。かくおほつかなければ、さら  
に忘れ聞こえず、折々につけて、なほ聞こえけり。交じらひも  
せず、宮の御もとへも参らず、眺め給へり。(あて宮三六六)

これは実忠からあて宮へ贈られた長歌である。この時すでに、あ  
て宮は春宮のもとへ入内することが決定していた。そのため「みる  
め求めむ かたもなし」、あて宮との逢瀬を期待することはできな  
いのだ、と悲嘆する内容となっている。

C 御前に、生海松の、石・貝つきながらあるを取り給ひて、藤壺に、  
「なかか参上り給はぬ。こなたに、皆ものせらるめるものを。  
浦なるやみるめは知らで須磨の海女は底にや潜く海の玉藻  
を

と思ふなむ、あやしき。今だに参上り給へ」とて奉れ給ひつれ  
ば、藤壺、

「底なるやみるめに隠るる海の藻はえこそ潜かねめに障りつ  
つ

人々の御覽せらむを思ひ給へてなむ」とて奉れ給へり。

(内侍のかみ四一〇—四一一)

これは宮中での節会の折、石や貝に付いた珍しい海松が献上され  
たことに際し、春宮からあて宮へ、参上を催促する場面である。春  
宮の歌にある「須磨の海女」はあて宮であり、このような海松を見  
ようとしてもしないで、との歌意である。それに対するあて宮の歌には  
「海松」に隠れて上手く潜ることができずに、またそのように隠れ  
る理由を「め」に障るためとする。ここでの「め」は、「目」と「布」  
の掛詞である。春宮のもとへ入内したあて宮は、「参上り給はぬ夜  
はなく、御局に、宮渡り給はぬ日なし」(あて宮三五九)とあり、  
寵愛を一身に受けている。そこには当然、先に入内していた他の妃  
たちの嫉妬が待ち受けており、あて宮は辛い日々を過ごしている。  
そのために、他の妃たちのいる仁寿殿には行けないのだ、というの  
である。ここでもあて宮は春宮から、「みるめ」、つまり「逢う」(参  
上する)ことを求められているのである。

D 左の大殿より、よい蜜・瓜・焼米・生海松・水落など奉れ給へ

り。北の方の御もとに、御文あり。「一日参りたりしかど、『出で立ちしたり』などありしかば、わづらはしきになむ、急ぎ。さて、海松は、『旅人のもとに』とて。

わたつ海の底に入りてぞ求めつるものとみるめを潜き出でなむとて

見習ひ給へや。焼米は、媪の齒は耐へで、噛み残したる。若人の御もとに」とあり。(中略)

中納言、見給ひて、「あななたじけなや。わづらはしく御心ざしあるを、会ふ期給へる」とて奉り給へり。御返り言は、「何ごとか。あやしうなむ」とて、「この海松は、

伊勢の海人もみるめをかくし潜きせばうきに心は沈まざらまし

焼米は、『狼にこそは』となむ。さて、大和には見え侍らずなむ。(国譲・中七三九)

これは正頼から実忠北の方のもとへ手紙とともに生海松などの品々が贈られた場面である。ここでは海松は贈答品であったことがわかる。正頼の歌には海の底に入って求めた「みるめ」とあり、この「みるめ」は「見る目」との掛詞である。『うつほ物語』の和歌総合研究』には、「みるめを潜き出でむとて」は、二人があうことができるようにと思つての意」とある<sup>14</sup>。正頼は、実忠と北の方の仲が夫婦らしくなるよう、との意で、「見るめ」の意を含む「海松」

を贈り、和歌に詠み込んでいることになる。北の方からの返歌には「伊勢」、「海人」、「みるめ」、「潜きせば」と、歌語「みるめ」の縁語が多く用いられており、諸注釈書において、<sup>23</sup>にあげた『古今集』歌が引歌として指摘されている。「みるめ」の修辞法によつて支えられた歌であるといえよう。

『うつほ物語』作中における「みるめ」の用例は、以上の四例<sup>15</sup>である。そのうちABCの用例は、あて宮に関わつて用いられているものである。また、いずれも「みるめ」に「見る」意を重ねて用いられている。

なお、『うつほ物語』の「みるめ」表現と『源氏物語』の「みるめ」表現の関係については、三村友希氏の論において若干の指摘がなされている<sup>16</sup>。

この<sup>2</sup>(引用者注、C)でよまれた「底」の感覚は、あて宮の置かれた物語状況を表して興味深い。紫の上物語のAの「底」(引用者注、「底のみるめものむつかしう」)については、『うつほ物語』<sup>1</sup>(引用者注、A)の例と似ている。その一方で、紫の上には水面をよんだ和歌があった。(中略)あるいは、若紫巻には「山の井」の「影」をめぐる光源氏と北山の尼君の贈答があった(若紫<sup>1</sup>二三〇)。光源氏と紫の上の「池の鏡」をめぐる贈答歌もある(初音<sup>3</sup>一四四、一四五)。その池の水面に映つたのは、幸福な夫婦の影であった。このような「底」と

水面に関わる問題全般の中に、「みるめ」表現のあり方も見つめられるべきであろう。

氏はこのように述べているが、これらの指摘については慎重に考えるべきである。

『うつほ物語』作中における「みるめ」の用例が、あて宮に関わって多く見出されることは、確認してきたとおりである。あて宮に贈られた和歌の表現に「みるめ」の語が用いられるのは、求婚者たちによってあて宮を「見る機会を得る」、すなわち逢瀬の機会を得ることを望まれているためである（A、B）。くわえて、Aの求婚歌群は、それぞれ別に詠まれているはずの贈答歌の中に用いられている語が、少しずつではあるが関係性を付与されて、求婚歌群を形成していることも確認できる。つまり、あて宮に関わって用いられているA、Bの「みるめ」表現は、あて宮求婚譚に関わって要請された語、表現のひとつとして理解すべきである。

またCの場面は、宮中におけるあて宮の状況を端的に表わすものである。室城氏は入内した後のあて宮について次のように述べている。<sup>17</sup>

あて宮は、かぐや姫の造型を受け継ぎながら、『源氏物語』の桐壺の更衣や藤壺を始めとする、のちの多くの物語に描かれる入内する姫君たちの先蹤として、物語のなかで、その生を生き

たのである。

『うつほ物語』から『源氏物語』への影響については、多くの先行研究があるが、<sup>18</sup>室城氏の述べるとおり、あて宮の春宮からの寵愛と他の妃たちの妬み、嫉みの様などは、『源氏物語』の桐壺更衣の語られ方と通底しているようである。<sup>19</sup>

三村氏はCの和歌の表現について、「あて宮の置かれた物語状況を表して興味深い」と述べる。これはあて宮の歌にある「底」と「みるめ」の語に注目したためであり、論旨は「底」と「みるめ」の語が紫の上にまつわる叙述において用いられる語に関わっていると、さらには『源氏物語』全体の「みるめ」表現を紫の上物語の中において読み解こうとするものであるが、この指摘には肯首しがたい。

なぜなら、三村氏の述べる『源氏物語』若紫巻の「底のみるめものむつかしう」が語られている叙述は、そもそも、紫の上物語ではなく、光源氏の供人から語られた播磨の国にいる明石の君にまつわる求婚譚の中に見受けられる表現である。したがって、紫の上物語に関係する表現として解することはできない。また、『うつほ物語』Cの和歌が宮中での苦境の中に身を置くあて宮と春宮との贈答歌であることを鑑みる時、ここでは紫の上ではなく、桐壺帝の寵愛と桐壺更衣という『源氏物語』が語り出しているものとの関係性を重ね合わせて読み解くことが妥当であろうと考える。つまりは三村氏のいう「紫の上物語」からは切り離して、「みるめ」の語が用い



られている『うつほ物語』、『源氏物語』それぞれの場面について考えるべきである。

その上でCの場面において重要なのは、春宮から「みるめ」つまりは参上することを求められながら、「みるめ」が障りとなって参上することができないと切り返すあて宮の和歌が、歌語「みるめ」の修辭法に支えられながらも、「めに障りつつ」他の妃たちの「目」を避けたいのだ、と自らの状況を伝える表現を導き出していることである。このような表現は『古今和歌六帖』や三代集の用例には見られない、歌物語が描き出す多様な人物造型や、物語内状況に要請されて導き出された表現であると捉えることができるのではないだろうか。そのように考える時、『源氏物語』における「みるめ」表現についても、その特徴を見出すことが可能となるように思うのである。

『源氏物語』における「みるめ」表現については、作中に用いられている他の「みるめ」表現の用例と比較するとき、「ものむつかしう」や「すさび」など、『古今和歌六帖』や三代集及び『源氏物語』に先行する歌物語の用例には見出すことができない、ある種の「暗さ」を有した語が「みるめ」に付与されて用いられているものがある。それが、明石の君にまつわる叙述において見出されるのである。<sup>(20)</sup>

三村氏は、『うつほ物語』Aにあげた兼雅の歌、「わたつ海の底にみるめの生ふればぞ我さへ頼む深き心」にある「底」の意と、光

源氏の発話である「何心ありて、海の底まで深く思ひ入らむ。底のみるめものむつかしう」(若紫①二〇五)に見受けられる「底」の意が類似しているという。述べてきたように、前者はあて宮求婚譚の中に位置付けられ、後者は播磨国司と明石の君との求婚譚の中にある。

『うつほ物語』の兼雅の歌にある「底にみるめの生ふればぞ」とは、海の底にあて宮との逢瀬の機会があれば、との「期待」の意を含んだものである。しかし、光源氏の「底のみるめものむつかしう」との発話は、明石の君に関する求婚譚に語られる明石の入道の言葉、「宿世違はば、海に入りね」(若紫①二〇四)や「海竜王の后になるべきいつき娘なり」(同)との言葉を受けて、「海の底での逢瀬などなんとなく気味が悪いなあ」との意である。「底」と「みるめ」の語は、共に「海の底」での逢瀬との意であるが、前者があて宮との逢瀬を期待する意に対し、海辺に暮らす明石の君に対して用いられている「みるめ」が導く「ものむつかしう」は、明石の君の状況を表出する、恋や求婚譚とはおよそかけ離れた語である。同じ海の底の「みるめ」との表現であっても、それぞれが表出する世界は異なったものであるといえる。つまりは、『うつほ物語』と『源氏物語』に見出される「底」と「みるめ」の語は、それぞれが重なり合う表現ではなく、両者をひきつけて考えることはできないため、関連性を見出すこともできない。

このように考える時、明石の君に関する「暗さ」を持った語を伴っ

て用いられる「みるめ」の語について、その独自の表現世界の構造を深く読み解くことが可能となるように思うのである。

### おわりに

これまで、歌語「みるめ」の用例を『古今和歌六帖』及び三代集に採られた和歌から、その修辭法について考察し、歌物語へと展開されてゆく「みるめ」の語が表出する表現世界の特徴を明らかにしてきた。歌語「みるめ」は男女の「逢瀬」の意を表す掛詞として和歌の中に多く用いられている。このような修辭法が歌物語へと展開される時、和歌が詠まれる背景がより詳しく語られることにより、「みるめ」の縁語である「海人」や「刈る」などの語のみならず、「浮き（憂き）」や「障る」など、物語背景と密接に関わる語を伴って用いられるようになることも確認できた。和歌から歌物語を経て『源氏物語』へ。歌語「みるめ」が導く言葉は、多様になっていくのである。「みるめ」に「見る目」の意を重ね、その修辭法によって支えられながらも新たな語を付与することにより、『うつほ物語』に語られるあて宮の詠歌や『源氏物語』における明石の君にまつわる表現などは成り立っていると考えることができる。物語が複雑になり、それに伴った表現を必要とする時、「みるめ」表現もまた、人物造型に関わって独自の語を導きながら、拡がりを見せはじめのだと考えられるのである。

### 注

- (1) 『古今和歌六帖』の表記は『新編国歌大観』による。引用にあたっては、宮内庁書陵部編『図書寮叢刊 古今和歌六帖』（養徳社、一九六七）を参照し、一部私に改めた。
- (2) 三代集の表記は、全て『新日本古典文学大系』に拠った。
- (3) 久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店、一九九九年）。
- (4) 引用は『新編日本古典文学全集』（小学館、一九九四年）による。
- (5) 以下『源氏物語』本文は『新編日本古典文学全集』より引用した。（）内は、巻名・巻数・頁を示している。
- (6) 引用は、前掲注4に同じ。
- (7) 片桐洋一『古今和歌集全評釈（中）』（講談社、一九九八年）五六〇頁。
- (8) たとえば、『新編日本古典文学全集』や石田譲二訳注『新版伊勢物語』（角川ソフィア文庫、二〇〇七年）など。また、片桐洋一『伊勢物語全読解』（和泉書院、二〇一三年）においても、「この章段の成立は、『古今集』恋三の六二三と六二四に偶然並んでいる在原業平と小野小町の歌によったものと見るほかない」と述べられている。
- (9) 高野奈未「近世における古典注釈学―小野小町「みるめなき」の歌の解釈をめぐって―」（『日本文学』第六二卷一〇号、二〇一二年一〇月）。
- (10) 引用は、前掲注4に同じ。
- (11) 以下『うつほ物語』本文の引用は、室城秀之『うつほ物語』（おうふう、一九九五年）による。



- (12) 室城秀之「あて宮求婚譚と求婚歌群」(『うつほ物語の表現と論理』若草書房、一九九六年)三〇七頁。
- (13) 前掲注12室城論文、三二〇頁。室城氏には他にも、あて宮求婚譚に関して、「あて宮求婚譚のなかの、地名を詠んだ歌をめぐって」(前掲注12に同じ)などの論稿がある。
- (14) 室城秀之編『うつほ物語の和歌総合研究』(二〇〇〇年)。
- (15) 検索は、『うつほ物語の和歌総合研究』(前掲注14に同じ)による。
- (16) 三村友希『源氏物語』「みるめ」表現考―紫の上物語を中心―(『日本文学』第六〇巻三号、二〇一一年三月)。
- (17) 室城秀之「うつほ物語におけるあて宮―『宮仕へ心行く』とは、何をか言ひけむ」(宮中への流離)―(前掲注12に同じ)二四七頁。
- (18) たとえば、秋山虔「男の文学と女の文学―宇津保物語と源氏物語」(『王朝の文学空間』東京大学出版会、一九八四年)や鈴木日出男『宇津保物語』から『源氏物語』へ(『王朝物語必携』学燈社、一九八七年)など。
- (19) このことについては、室城秀之「うつほ物語と源氏物語」(前掲注12に同じ)に詳しい。
- (20) 拙稿「『源氏物語』における「みるめ」表現―明石の君を中心として―」(『立教大学日本文学』第一一五号、二〇一六年一月)。

(おおたけあかり 大学院博士後期課程在學生)